

## 論文の内容の要旨

論文題目： 日本語の名詞志向構造と韓国語の動詞志向構造

氏 名： 金 恩愛

### 1. 問題設定

「あることがらを言語上でいかに表現するか」という、表現のありかた、あるいは表現の志向性の総体を「表現様相」と呼ぶ。日本語と韓国語の間には文法的な類似性があるが、表現様相には各言語の精緻な「言語らしさ」が明らかに表出する。例えば日本語で「今日も歩き？」という会話を自然な韓国語にすれば“오늘도 걸어서 가?” (lit. 今日も歩いて帰る?) となり、あるいは「雨の日に会っためがねの子覚えてる？」を自然な韓国語にすると“비 오던 날 만났던 안경 끼 애 기억나?” (lit. 雨降っていた日会っためがねかけた子記憶出る?) となる。いずれも、名詞を用いた日本語表現が自然に成立するところで、韓国語では動詞・形容詞を用いる必要がある (あるいはその方が自然である) という例である。本研究は、このような現象を「日本語は名詞表現を志向し、韓国語は動詞表現を志向する」という表現様相の違いと捉え、日本語の「名詞志向構造 (nominal-oriented structure)」と韓国語の「動詞志向構造 (verbal-oriented structure)」について、分析の方法を模索しつつ事例に基づく包括的な記述を試みたものである。

## 2. 議論の基本的な方向性

本研究は大きく2つの部分に分かれる。第1章から第4章では本研究の基本的な方向性を論じた。第1章「序論」で研究背景と本論の課題および各章の内容について述べ、次いで第2章では本研究で扱う言語現象と先行研究について述べた。日本語と韓国語の相違点について指摘する先行研究の多くが、「日本語では韓国語に比べ名詞表現が好まれ、韓国語では日本語に比べ動詞表現が好まれる」という現象に言及しているが、この問題に関する包括的な記述はいまだ十分にはなされておらず、部分的な観察・記述に留まっている。また取り上げられた言語資料も、作例あるいはごく限られた範囲の実例であり、生きた言語の様相を捉えているとはいえない。「日本語は名詞表現を志向し、韓国語は動詞表現を志向する」という直観のもとで、それにあてはまる例をあげているのみであり、分析の方法や主張の根拠となる客観的なデータ等が必ずしも明確ではない。先行研究が直観に基づき論じてきた内容が正しいとしても、そのことを客観的に裏付けるには表現様相に関する言語間の相違、すなわちある特定の「言語場」の下で、日韓両言語がいかなる表現の選択を要請するのかを客観的に分析する方法を開発する必要がある。本研究はこのような議論の方向性に立脚するものである。

第3章では、分析の根幹となる言語資料と研究方法について述べた。本研究は日本語を基準言語として「日本語の名詞表現が韓国語ではいかに現れるか」の詳細な観察・記述に徹した。つまり、日本語と韓国語の対照研究でありつつ「韓国語を鏡として日本語の特徴を浮かび上がらせる」ことに重点を置いたということである。本研究は表現様相の対照研究における言語資料の重要性に鑑み、言語資料の選定には細心の注意を払った。①同じ言語場で使用される表現の対照を行うため、基準言語の日本語資料に対し対照言語である韓国語資料は、日本語資料の韓国語版翻訳テキストを用いた。②言語資料の著者・翻訳者の重複を避けることで、個人差の要因を抑えた。これによりデータの信頼性を高めることができた。③テキスト類型を小説に限定することで、「日本語は名詞表現を志向し、韓国語は動詞表現を志向する」という現象に関する性急な一般化を避けた。〈小説〉に限定されるとはいえ、その範囲内で一定の傾向を明示する段階に至った。④小説の選定にあたっては、東京生まれの作家が現代を背景として1990年以降に執筆・発表し東京以外の方言が著しく混在していない、という条件を満たすものに限定した。また、⑤計量調査を行うことで議論の客観性を高めることができた。

第4章では「名詞表現」を概観した。日本語の名詞に関する諸説を参照しながら、本研究の問題意識とそれらの諸説との関わりを確認した。本研究は包括的な観察を行うことを目的とするため名詞の範囲を広めにとっており、名詞の性質から「名詞的な名詞」「形容詞的な名詞」「動詞的な名詞」「副詞的な名詞」という4つの下位範疇を設定した。また、意味の重層性(用言性)という観点から、「雨」「めがね」のような単純語を〈軽名詞(light noun)〉、「家族思い」「恩返し」「小顔」「探し物」のような複合名詞や派生名詞を〈重名詞(heavy noun)〉として区別した。この区別に基づいて設定した「重名詞+機能用言(function verb)」「軽名詞+実質用言(meaning

verb)」という観点も、「日本語の名詞志向構造と韓国語の動詞志向構造」のメカニズムを解明する上で重要な切り口となる。このように名詞の性質(軽名詞／重名詞)と用言の性質(機能用言／実質用言)を関連付けて、名詞度と動詞度の強弱に注目することで、名詞表現と動詞表現の質的な差異に接近できることを示した。

### 3. 言語資料の計量的調査とその分析

本研究の中心をなす第5章から第7章では、条件を統制した言語資料(日本語の小説と、その韓国語版翻訳書)を計量的に調査しつつ、各章の分析方法に基づき具体的な考察を行った。

第5章では、「日本語の名詞志向構造と韓国語の動詞志向構造」の全体像を示した。①文の成分、②「名詞的な名詞」「動詞的な名詞」「形容詞的な名詞」「副詞的な名詞」という名詞の性質から見た名詞の下位範疇、③語彙的な意味の比重から見た〈軽名詞〉と〈重名詞〉、以上の3つを複合的な中心軸として、日本語のいかなる性質の名詞が、いかなる構造において、いかなる機能を司るときに、韓国語では動詞構造化するのかを考察した。その結果、文の成分の観点からは「述語＞修飾語＞目的語＞主語」順に動詞構造化の傾向が強く、名詞の性質からは、「手早さ」がポイントだ」「思い出し笑い」をしながら」のような「形容詞的な名詞・動詞的な名詞」における動詞構造化が顕著であった。また、上記の例にも関連するが、「探し物」をする」「ぶっきら棒な言い方」をした」のような〈重名詞(句)〉構造における動詞構造化が目立ったのも特筆すべき点である。日本語の名詞表現が韓国語で動詞構造化する要因としては、文の成分より名詞の性質のほうがより強く働いているように見えるが、これについては今後、検討用例の拡大を含めた、より綿密な調査が必要である。

第6章および第7章では、第5章で全体像を把握する際に取り上げた日本語の名詞表現のうち、とりわけ韓国語で動詞構造化が顕著であった類型を扱った。まず第6章では、日本語の名詞志向構造と韓国語の動詞志向構造の典型例として「名詞類＋する」の分析を行った。分析の対象となる前項要素(名詞類)を「名詞部分」と「助詞部分」とに分け、一致・不一致を調査した。その際、①品詞の一致：名詞、助詞といった品詞の一致(主要な条件)、②語種の一致：名詞の場合は漢語・和語・外来語といった語種の一致、の2つの条件をおいた。他方「する」については、韓国語で「하다(lit. する)」が対応する場合、「対称構造(하다構造)」とし、「하다」以外が対応した場合は「非対称構造(非하다構造)」と分類した。例えば前項要素で名詞・助詞ともに一致した場合(これを「○○」タイプとする)の対称構造とは、日本語の「結婚をする」が韓国語でも「결혼을 하다(lit. 結婚をする)」のように現れた場合である。このように対応関係を精密に見ていくことで、「名詞類＋する」における動詞構造化の究明に向けて一歩前進できたといえる。計量結果を見ると「○○」タイプの対称構造は360例・34.1%に止まっており、残りの693例・65.9%ではなんらか表現のずれが生じている(非対称構造)。またここで特筆すべき点は、例えば、「〈結婚して〉しまったね」が「결혼을 하고 말았구나(lit. 結婚をしてし

まったね)のように現れる①「分離用言における表現様相の違い」と、「いつにする?」「〈本にする〉ことも」が「언제 만날래? (lit. いつ会う?)」「책으로 만들 수도 (lit. 本に作ることも)」のように現れる②「代用形(pro-form)」における表現様相の違いである。

第7章では、日本語の「～さ」名詞構造が韓国語でどのように現れるかを考察した。全942例のうち、韓国語でも名詞表現で現れた例は615例・65.3%である。残りの327例・34.7%は名詞表現以外の形で現れた。その結果、①統辞的に、あるいは意味的に列挙、対比、比喩の対象となる「～さ」派生名詞や、「〈その新鮮さ〉を：그 신선함을 (lit. その新鮮さを)」のように、[指示連体詞+～さ]構造における「～さ」派生名詞は、韓国語で名詞形成語尾「-로」の形で現れる傾向が強い。これに対して②[体言+の+～さ]構造における「～さ」派生名詞は、語順の変化などを伴って用言構造化する傾向が強い。この構造で注目すべき点は、「〈自分の大胆さ〉に：자신의 대담함에 (lit. 自分の大胆さに)」「〈隆志のやさしさ〉を：다카시의 친절함을 (lit. 隆志の親切さを)」のように、修飾語の体言が人間名詞の場合は名詞で現れやすいことである。最後に③「高さ」「広さ」「厚さ」といった尺度名詞が尺度性を保つ場合、韓国語では名詞の形で現れるが、尺度名詞としての中立性を失い程度性が強くなると用言構造化する傾向が強いことが明らかになった。

#### 4. 本研究の意義と課題

最後に第8章「結論」では、本研究を総括した上で本論の意義について確認し、本研究の課題と今後の展望について述べた。本研究の意義は、「日本語の名詞志向構造と韓国語の動詞志向構造」について、①表現様相に関する言語間の相違を把握するための方法論の開発、②実例に基づく客観的・包括的・体系的な記述、という2つの点を重視した分析を行った点にあると言える。今後は本研究の不備・不足を補いつつ、本研究のアプローチとは逆に韓国語を基準言語として日本語表現の様相を検討するなどの課題について、順次研究を進めていきたい。